

ワクチンの義務化と文化協会

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井 陽一 Yoichi Fukui

11月1日、ニューヨーク市では、市の職員に対するワクチンの義務化が実施に移された。ニューヨーク市では、約38万人の公務員が働いているが、ワクチンを接種していない職員は無給の停職扱いになる。特に問題になっているのは、警察や消防、衛生局の職員の接種率が低く、その割合は8割以下である。特別なシフトを組んで人手不足を補っているが、救急隊員の対応やゴミの収集に支障をきたしており、家の前には何日もゴミが放置されている所も出てきている。デ・ブラシオ市長公邸の前には数千名の人々が集まり、義務化反対のデモが行われている。

また、アメリカに空路で入国する人に対して、バイデン大統領は、ワクチン接種証明の提示義務を命じ、11月8日よりこれが執行された。自由の国を標榜するアメリカでさえ、コロナ禍という名の下に様々な規制が生まれ、自由を訴える人々の叫びがあちこちで聞こえている。

文化協会での対面活動

そのような状況の中、現在、文化協会での対面活動は、ワクチンを接種した人のみに限られているが、そのおかげで、日本語対面クラスをはじめ、コンサートや展覧会なども再開できている。文化協会の入口で接種証明書を見せて入館してもらう。子供たちはまだワクチン接種の対象になっていないため、子供日本語クラスでは、毎回健康観察スクリーニングをオンラインで提出してもらい、入口で熱を測って入館している。しかし、5歳から11歳までの子供たちにもワクチンの接種が認可され、11月8日から通学している学校で接種会場が設けられ、子供たちへの接種が始まる予定だ。

現在、大人向けの日本語クラスでは、対面クラスが4クラス、オンラインクラスが13クラス、ハイブリッドクラス（対面とオンラインが混在）が7クラスで、計24クラスが行われている。子供クラスでは、対面14、オンライン3、ハイブリッド11で、計28クラスが行われている。ハイブリッドクラスは、一人の先生が対面とオンラインの両方の生徒を相手に授業を行うため、細かい指導が困難となっており、将来的には、どちらかに特化したクラスに変更していくことになると思われる。

ニューヨークセンターでの月次祭も同様に、おつとめ奉仕者も参拝者もワクチン接種者だけに限定されており、未接種者は、参拝をお断りしている。今後は、子供たちを含めワクチン未接種者の方にも参拝していただけることが課題となっている。

文化協会主催「Arts at Tenri」コンサート

10月17日、パンデミックが始まって以来、文化協会主催としては初めてのライブ演奏会 Arts at Tenri が開催された。演奏は三味線の木村伶香能さんとチェロリストの玉木光さんの夫婦二重奏ユニット「デュオ夢乃」を迎えて行われた。「和」と「洋」



写真：玉木光さんと木村伶香能さん

が織りなす室内楽に、そして久々に聴くライブ演奏の音色に、来場した観客の方々は魅惑された。

三味線の木村さんは東京藝術大学卒業後、日本で活躍していたが、ある時突然文化協会を訪れ演奏会をさせて欲しいと提案され、それがきっかけで文化協会はもとよりニューヨークで頻繁に演奏するようになった。2006年、教祖百十年祭の年には、天理の陽気ホールでも演奏した。

玉木さんは日本に住んでいた頃は天理の音楽研究会によく通っていたそうだ。アメリカに留学後、インディアナ州フォートウェイン・フィルハーモニー管弦楽団に在籍し、首席チェロ奏者として活躍していた。二人はアメリカで出会い、結婚しニューヨークに移り住み、和楽器と洋楽器からなるアンサンブル「デュオ夢乃」を結成した。最近では、毎年開催されている「ムジークフェストなら」音楽祭で招待演奏を行っている。夫婦ならではの緻密な演奏には定評があり、文化協会の演奏会を支えてくれる大切な二人だ。

Arts at Tenriの演奏会はロウアー・マンハッタン文化評議会（以下LMCC）にも選出され、助成金をいただきながら活動している。LMCCは1973年に設立された芸術支援機関だが、2001年に起こった同時多発テロ以降、特にマンハッタンのダウントウンで行われる文化芸術活動の支援に力を入れており、文化協会もその地域に位置している。今回のパンデミックでも特別な支援を行っている。

ワクチン義務化による分断

しかし、現在のところこうした音楽を楽しめるのはワクチン接種者のみに限られている。ニューヨークでは、コンサートホールや美術館、レストランまでが接種証明を見せないと入場できない。それにもかかわらず、ワクチンを打たない人は全体の約2割を占めている。今まで文化協会の活動を楽しみに来場される人々の中には、ワクチン接種を拒否している方もいる。そのような方からは、「世界たすけ」を目指す天理文化協会には、市の規則に惑わされることなく、ワクチンを接種していない人々をも受け入れて欲しいと願う手紙も頂戴している。パンデミックにより分断が進みつつある状況の中、いかに活動を進めていくかという課題を突きつけられている。